



リーディング・テストの 常識・非常識

根岸 雅史 Negishi Masashi
(東京外国語大学)

今回は、リーディング・テスト作成の常識について再考してみる。どのような常識も、一度は疑ってみる価値があるはずだ。

1. 英文は「既習」か「未習」か

まず、第1の常識は、「定期試験のリーディング・テストの英文は、教科書から出す」というものである。教師が問題意識を持っているかどうかは別として、ほとんどの場合、教科書から出ているのが現状である。

この問題の議論に当たり、テストの波及効果(教科書の英文をテストに出すことで、生徒に教科書を何度も読ませる効果)を期待して出すという点を別にすれば、既習の英文を出題し、その内容理解を問うというのは、多くの問題をはらんでいる。

まず、既習であるために、読まなくても内容を知っているわけであるから、正解できたとしても、出題された文章の内容理解が本当にできるかどうかはわからない。その意味では、定期試験のリーディング・テストは「出来レース」のようなものである。また、内容が既習であるために、教科書の英文は総合問題として出題されており、よく見ると内容を問う問題がほとんどないという皮肉な現象も起こっている。英文が出ていても、リーディング・テストにはなっていないのである。

こうした傾向の意味するところは、授業の目標は「その特定の英文を理解すること」になっているということである。しかし、本当にそれでいいのだろうか。本当にそれ「だけ」でいいのだろうか。

2. 「テキスト選び」と「問題作り」どちらが先か

第2の常識は、「リーディング・テストの作成では、

テキストを選んでから問題を作る」ということである。定期試験でリーディング・テストを作るときには、まずは英文を試験範囲から選択し、そこから何が問えるかを考え、質問を作っていくのではない。あるいは、試験範囲の中で、色々なことを問えそうな英文を探しだし、それから具体的な作問に入るということもあるかもしれない。いずれにしても、リーディング・テストは、テキスト探しから始まっている。

しかし、世界の様々なテスト開発機関においては、逆にテキストを決める前に問題がほぼ決まっているというのが、「常識」と言っていざらう。私がリーディング・テストの作り方に関してこのことに気がついたのは、日本の英語入試問題と海外の英語能力テストを分類していたときであった。海外の多くの英語能力テストでは、どの回のテストであってもほぼ同じような質問が繰り返されている。それに対して、日本の入試問題では必ずと言っていいほど、毎回異なった質問がなされている。よく言えば、日本のリーディング・テストは独創性に富む。しかし、別の見方をすれば、たまたま選んだテキストの特性により、問題作りが大きく左右される、「日替わり定食(こちらは、仕入れに左右される)」のようなテストで、リーディング力をどう捉えているか見えてこない。

言語テストの文献には、よく test specifications という用語が出てくる。これは、テストの設計図のようなもので、そのテストの作り方が詳細に書かれている。ここでは、リーディング・テキストについても、長さ、内容、言語的難易度やテキスト・タイプなどが規定されているが、同時に、測定するリーディング・スキルも規定されている。いくつかの具

体例を Heaton (1988: 106) から引用する。

- understand explicitly stated information
- understand relations between parts of a text through both lexical devices and connectives
- perceive temporal and spatial relationships, and also sequences of ideas
- understand conceptual meaning
- anticipate and predict what will come next in the text
- identify the main idea and other salient features in a text
- generalise and draw conclusions
- understand information not explicitly stated
- skim and scan (looking for the general meaning and reading for specific information)
- read critically
- adopt a flexible approach and vary reading strategies according to the type of material being read and the purpose for which it is being read

こうしたことが決まっているのであれば、問題を先に作ることもさほど難しいことではない。

この考え方に近い方法でリーディング・テストを作成しているのが、最近の東京都中学校英語教育研究会の「英語コミュニケーション・テスト」である。2009年のテストの特徴的な実例をいくつか見てみよう。文章の最後に適する文を選ばせたり、文を並べ換えさせたりする【文章構成理解問題】、指示代名詞が何を指すかを選ばせる【指示代名詞問題】、文章にふさわしいタイトルを選ばせる【タイトル選択問題】等の他に、【概要理解問題】や【詳細理解問題】などがある。これらは、テスト・デザインが変わらない限り、今後も出題されることになる。

3. 常識の裏側

では、なぜこのようなリーディングのテスト作りが、日本の学校では行われないのであろうか。その

原因は、おそらくリーディング指導の意識と関わっている。リーディングの指導において、教科書の英文の内容理解以外の目的が存在しないからではないか。教科書の中の英文は、文法などの学習事項を文章の中で提示するためのもので、リーディング・スキルを身につけるためのものではない。

実は、海外の中学校英語教科書と日本の中学校英語検定教科書を比較してみると、日本の教科書にはリーディング・タスクが極めて少なく、種類も限定的であることがわかる。このことは、日本では、伝統的にリーディング・テキストの内容理解に関する指導は、教師に任されてきたということ意味している。しかし、その指導は往々にして、その場その場の文レベルの理解を中心とした指導であり、英語のリーディングに必要なスキルを包括的にカバーしたものではない。おそらく、スキルが教科書の中で明示的なタスクとして示され、スキル・シラバスのようなものが提示されていれば、教師もそれを意識するのだろうが、現実はそうっていない。

4. 結語

これらの問題は、結局のところ、リーディングの指導観の問題に行き着く。リーディングに関して、何を教えるのかという明確な目標がないのである。これが明確になっていれば、授業で扱った英文そのものの理解だけが最終目標とはならないはずだ。

どのような読みの力をつけたいかということが明確になれば、それが指導目標に反映され、指導自体も変わってくるであろう。この指導目標があれば、リーディング・テストの問題もそれを反映したものとなるはずだ。

もちろん、波及効果を考えれば、教科書の英文をそのまま出すということがあってもよいかもしれない。しかし、そうした問題ばかりでは、本来目指したリーディング・スキルを包括的に測ることは容易ではない。常識を一度疑ってみることで、授業もテストも、きっとこれまでとはまるで異なった景色になるだろう。

【参考文献】

Heaton, J.B. (1988) *Writing English Language Tests*. London: Longman.